

2024 年度ミニ観察会 少人数でじっくり観察しようー 身近なきのこを観察しよう 2024

主催：NPO 法人自然観察大学 担当講師：根田仁



園路わきの切り株は多様なきのこの饗宴。まるで博物館の展示のよう

この夏の猛暑と乾燥で、ちゃんとキノコが出てくれるのかと心配していました。ところが観察会の直前に降雨があり、気温も下がって、ほぼベストの状態で観察会が実施できたと思います。参加いただいたみなさんの心がけというものです。

新宿御苑は芝生と庭園というイメージがありますが、園内の“母と子の森”は武蔵野の里山を想定してつくられ、管理されています。観察会はこのエリアを中心に実施しました。



新宿御苑マップ
公式 HP より

担当講師については【講師紹介】をご覧ください。(<https://sizenkansatu.org/kousishoukai.html>)
写真提供者名はそれぞれに記してあります。記載のない写真は担当講師または自然観察大学のものです。
この記事および本 HP の写真などの無断転載はお断りいたします。©2024 NPO Sizen Kansatu Daigaku



腐ってしまったナラタケモドキ

● ナラタケモドキ

ここにきのこの残骸があります。
10月1日に下見をした時は、ちょうど傘が開いたきのこ（子実体）が株状に発生していましたが、5日後の今日は残念ながら腐ってしまいました。

ナラタケ属のきのこは倒木、切株から発生します。土壌から発生することもあります。木材腐朽菌ですが、植物に対する病原性もあり“ならたけ病”として恐れられています。



参考：下見のときのナラタケモドキ(10月1日撮影)



参考：株状に発生したナラタケモドキ(10月1日撮影)

ナラタケモドキのような軟質のきのこの多くは、1日で萎れたり腐ったりします。中には数時間で消えてしまうきのこもあり、干からびても雨で濡れると再び胞子を飛ばすきのこもあります。一方、カワラタケ(後述)などの硬質のきのこでは、数週間から数か月その姿をとどめています。

● エリマキツチグリ

エリマキツチグリは、だんご形のきのこで、成長のはじめに全体を被っていた被膜は、成熟すると裂けて、周辺部に残ります。きのこの頂部に孔（あな）があり、内部に作られる胞子は、この孔から吹き出ます。

林内の落葉は、微生物によって分解されます。エリマキツチグリが生えている周辺の落葉を剥いてみると、エリマキツチグリの白い菌糸が張り巡らされて、落葉を分解していることがわかります。



エリマキツチグリ(やや古い)



指で押すとほこりのような胞子が吹きき出す

● ベッコウタケ

サクラには、いろいろな種類の木材腐朽菌が発生します。その中でもベッコウタケは、根株の心材部分を腐朽させ、木が倒れたり、枯死したりすることにつながるため、恐れられています。きのこは最初黄褐色の塊で、ゆっくり成長します。長く姿をとどめていますが、翌年には消えてしまいます。



ベッコウタケ。硬質で傘は成熟すると半円形または扇形など



傘の裏には管孔があり、その中で胞子が作られる

● アラゲキクラゲ

漢字で書くと“荒毛木耳”。その名の通りに木に生える耳の形をしていて、傘の表側は剛毛で被われます。表面の毛が少なめの近縁種キクラゲ（木耳）もあり、どちらも広葉樹の枯れ木に発生します。

食用に栽培されていて、スーパーなどで販売しているきくらげは本種です。以前は乾燥品が流通していましたが、近年は生の物も売られています。



木の杭に発生したアラゲキクラゲ



ムジナタケ

● ムジナタケ

土壌の腐植質を分解して栄養にしているきのこです。

傘の表面が獣の毛皮のように見えるのでこの名がつけました。近縁種には、イタチタケ、ムササビタケがあります。

このなかまは、森林以外にも、畑、庭園、街路樹の根もとなど、いろいろな所に生えるので、見る機会が多いきのこです。



●切り株は博物館のよう

クヌギの切り株にいろいろなきのこが生えて、博物館のようになっています。
カワラタケ、カイガラタケ、ナラタケモドキ、コフキサルノコシカケの4種が確認できます。
倒木・切り株などの枯れた木は、1種類の微生物が分解することは少なく、分解段階、水分・温度などの条件の違いにより、さまざまな微生物によって分解されます。

この切り株で、4種のきのこの関係はどうなのでしょう？
コフキサルノコシカケの子実体は多年生で毎年大きくなります。
軟質のナラタケモドキは数日で萎れて腐ってしまいます。（今日の最初に観察したきのこです）
硬質のカワラタケとカイガラタケは、数週間～数か月、その姿をとどめています。

●ニガクリタケ

さまざまな樹種の枯れ木に発生します。
発生期間は長く、冬に見かけることもあります。
栗色から黄色の傘で、ひだは成熟すると茶色になります。

近縁のクリタケは食用きのことして栽培もされていますが、それに似ているニガクリタケは毒きのこで中毒例がときどきあります。
ニガクリタケはクリタケと比べて明るい色の傘になります。



ニガクリタケ（傘の一部が破損）

● クシノハシワタケ

落ちた枯れ枝に張りついているものがあります。これもきのこで、クシノハシワタケです。広葉樹の枯れ木に発生します。傘はつくらず、基質の木材に張り付いていますが、周縁部がまくれ上がることもあります。不規則な形の穴状、迷路状、櫛（くし）の歯状になり、その内側の表面に胞子が作られます。



↑ 枯れ枝に張りついたクシノハシワタケ

←
表面に不規則な凹凸があり、
へこんだ部分に胞子をつくる

● ハリガネオチバタケ

落ち葉から小さなきのこが出ています。ハリガネオチバタケです。落ち葉を分解して栄養を得ています。

傘は茶褐色で、放射状の筋があります。柄は黒褐色で針金状で硬いので“針金”の名前があるのでしょうか。ひだが疎（ゆる）なことが特徴です。

このなかまは種類が多いのですが、小さくて特徴が少ないため同定が難しく、名前のついていない種類も数多くあります。



ハリガネオチバタケ

● ツチグリ

内部に胞子ができるだんご形のきのこで、いまここで見られるのは幼菌です。
はじめはこのような丸いだんご状で、この中には胞子がびっしり詰まっています。
成熟すると外側の膜が星状に裂けて開き、真ん中に孔が開いて、雨粒などが当たった衝撃で胞子を噴出します。

先ほど見たエリマキツチグリと形がよく似ていますね。

ですが、エリマキツチグリは腐生性なのに対し、このツチグリは菌根を形成する共生菌です。ここではブナ科のマテバシイと共生しているようです。

エリマキツチグリとツチグリは遠縁のきのこになります。



ツチグリの幼菌



ツチグリを手にとって押すと、胞子が噴き出した



参考：ツチグリの幼菌を切ると、中には胞子がびっしり

● ツマミタケ

ちょっと不思議な形のきのこがあります。

ハエが来ているものもありますね。

先端部が5つに分かれていて、へこんだ部分には粘液がついています。この粘液には胞子が含まれています。

この粘液をちょっとだけ指にとって、においを嗅いでみましょう。

※ 何人かが嗅いでみて、顔をしかめる。

ちょっと臭いですよね。このにおいでハエが集まってくるようです。

多くのきのこの胞子は風で散布されますが、このなかまは、臭い粘液でハエなどの昆虫を呼び



ツマミタケ。ハエが来ているものもあった



寄せ、昆虫によって孢子が運ばれるという特殊な性質を持っています。

ところで、生え際のところに白っぽい膜がありますね。ちょっと掘ってみましょう。

じつは、幼菌のときにはこの白い膜が全体を包んでいて、卵のような形をしていました。成熟して、卵の頭頂部を突き破って本体（角状のきのこ）が出てきたというわけです。白い膜は卵の殻にあたるものでした。

よく見ると、その下には白い菌糸が見えています。菌糸はこのあたりに広がっているはずで、これがきのこの本体というわけです。

←

ツマミタケの生え際を掘ってみた

● チャダイゴケのなかま

地面にごく小さいものが見えます。チャダイゴケと言いますが、コケではなくきのこです。

肥えた土壤に生えますが、腐ったウッドチップや穀殻、わらなどからもよく発生します。

コップのようなきのこで、中に基石のような孢子の詰まった袋があります。この袋にはバネのような紐（ひも）がついていて、雨粒が当たると袋がはじけ飛んで、この紐で周囲に付着します。



チャダイゴケ。小さいので見逃してしまいそう



未熟なチャダイゴケ



熟すと頂部が開き、さらに白い薄い膜が破れる。中には基石のような孢子の詰まった半透明の袋がある

.....

後日アンケートで寄せられた質問に対して根田先生からご回答いただきました。その一部を紹介させていただきます。

Q 植物は種によって朝開花するもの、昼開花するもの、夜開花するもの、中にはハゼランのように一定の時間に開花するものがありますが、きのこは種によって子実体が開く時間帯が決まっていたりしますか？(ADさん)

A きのこの胞子は湿度の高い早朝から午前中に子実体(きのこ)から胞子を飛散させることが多いです。

Q テングタケとイボテングタケの見分け方を教えてください。(SMさん)

A 傘の表面に散在する鱗片の形が、テングタケは“ちぎれた薄い膜の破片”、イボテングタケは“いぼ状の小さい塊”です。

Q キノコの色は、なにか生存戦略に有利に働いているのでしょうか？(TGさん)

A (私の情報不足かもしれませんが)きのこの色と生存戦略についての関係はわかりません。きのこの場合は、胞子が風で運ばれることが普通です。また、色よりも匂いで虫などの動物を呼び寄せることが多いです。

Q 芝生の領域にはまったくその他の植物やキノコの痕跡が見られないようです。土壌から他の植物やキノコは死滅してしまったのでしょうか？(ITさん)

A 芝生は管理されていますので、他の植物の除去などはされているかもしれません。きのこなどの他の微生物は、(おそらく)色々な種類のものが生育していると考えられます。これらの微生物は、芝生の環境、季節によって変化していることも考えられます。



参加いただいたみなさん、担当いただいた根田仁先生、スタッフの西田恵美子さん、ありがとうございました。また今回は特別に新宿御苑でボランティアガイドをつとめておられる為野陽子さんにご案内いただきました。あらためて御礼申し上げます。

さらに終了後に有志による観察を続けました。延長観察では、少年きのこ博士の坂本駿さんに案内していただきました。坂本駿さんには観察会を通じてきのこ探しをリードしてもらいました。ありがとうございました。

写真協力: 檜聡 レポートまとめ: 大野透

.....以下、おまけの写真です.....



↑ ヒメツチグリのなかま

→ テングタケ or ウスキテングタケ



← ↑ ワサビカレバタケのなかま(たぶん)
とその菌叢



↑ ヒトヨタケノなかまによるフェアリーリング
(点線が仮想エリア)

→ ヒトヨタケノなかま

